東宝
彼のオートバイ
彼女の島

ふたつの夏のあいだに物語がある。

原作 片岡義男

青年の一人称で少し長めのストーリーを書いてください、と『野性時代』と担当エディターから命じられて書いたのが『彼のオートバイ・彼女の島』だ。8年も前のことだ。一般の本になったとき、その表紙に「夏はただ単なる季節ではない、それは心の状態だ」という文句を、ぼくは印刷してもらった。

夏になるとオートバイに乗って日本じゅうを旅してまわる若いひとりの女性が、自分にとっての夏というものを彼女なりの言葉で語ってくれたのをぼくがひとことに要約すると、このような文句になったのだ。青年の一人称による、少し長めのストーリーは、実はこの時始まったのだ。前の年の夏と今年の夏と、寸分たがわないふたつの夏の間にいまの自分がいる、というテーマもこの時の彼女がくれた。タイトルは『彼女のオートバイ・彼の島』だったのだが、書きおわってから主人公の性をいれかえ『彼のオートバイ・彼女の島』となった。だから、本当は、彼も彼女も同一人物なのだ。

片岡義男
早稲田大学法学部卒業。東京生まれ。学生時代より商業雑誌に文章を発表し、昭和49年5月に創刊された総合文芸誌『野生時代』(角川書店)に、ロングボードの頃のハワイの波乗りを描いた『白い波の荒野へ』で小説家としてデビューした。50年、第2回野性時代新人文学賞を『スローなブギにしてくれ』という短編の少年少女小説で受賞する。

「彼のオートバイ、彼女の島」は、角川映画として「スローなブギにしてくれ」「メイン・テーマ」に続く3作目である。

僕の、バイクグラフティ。

彼のオートバイ 彼女の島

ふたりがひとつになって走ったとき、

僕の青春はあざやかに加速する。

大林宣彦監督作品
原田貴和子・第1回主演

製作■角川春樹

原作■片岡義男（角川文庫版）

東宝

主題歌■
「彼のオートバイ彼女の島」
唄・原田貴和子
（角川レコード／
キャニオン・レコード）

製作■角川春樹事務所
配給■東宝株式会社

撮影が一番大変だった温泉のシーン。これを乗り越えた時、スタッフが送ってくれた拍手ほどうれしかったものはありません。

—原作（片岡義男文学）は原田さんと同年代の人たちに大変人気のある小説ですね。原作との出会いはいつ頃だったのですか？

原田　主演作品としての映画化が決まった時です。それが片岡さんの本との初めての出会いでした。

—初めて読んだ片岡文学についての感想を聞かせてください。

原田　片岡さんの本てタイトルがおしゃれですね。中味もイメージ通り。素直に読めました。ああ、私はこれを演るんだなあと、バイクに乗る自分の姿を想像しながら……。

—片岡さんの本てすんなり読めますよね。ヒロインのミーヨは天才ライダーの素質を持った魅力的な女性ですが、この役は原田さんにとってはむずかしいものでしたか？

原田　私は50ccの免許しか持っていないのでバイクのシーンはほとんど吹き変えなんです。でも、この役って自分が演ったせいか今すごくなつかしく思えますね。撮影中も不思議と自分はこの役を演るために生まれて来たと思いこんでいました。温泉街、浴衣、ぬれた髪、ゲタ……こういうものって自然に私の日常生活の中にあるんです。撮影が終わってからもしばらくは役からぬけられませんでした。

—ミーヨと原田さんには共通点が多かったわけですね。

原田　ええ、私は島の女の子ではありませんが、私の育った長崎にも坂道や山があります。友達が遊びに来た時「〇〇ちゃ〜ん!!」って走ってむかえに行ったものでした。でも、身近な経験を演じるって意外とむずかしいですね。ふだんは自然にやっていることなのにカメラがまわり出すと意識しちゃうんですよ。

—撮影が始まって最初にカメラがまわった時の気持ちはどうでしたか？

原田　それがあまり緊張しなかったんですよ。共演者や監督は全く知らない人ではなかったし、最初から気も合っていたせいでしょうね。

—共演者が同年代というのは現場にいて心強いですか？

原田　やっぱりそうですね。自分と同じようなことを感じたり考えたりしている人がそばにいるって心強いです。話もできるし。

—ライバル意識はなかったのですか？

原田　ありましたね。特に竹内（力）くんには。お互いに初めてのことばかりでとまどいながらも、この映画に対する意欲は誰にも負けないぜっていうかんじで……。

—竹内さんは相手役として良いパートナーでしたか？

原田　とても真面目な人です。セットに入るギリギリの時間まで芝居のやりとりとか練習していました。私がもうこのへんでいいかなと思って台本を置いても、彼は夢中でおさらいしているんです。ああ、私もやらなきゃという感じで——触発されましたよ。

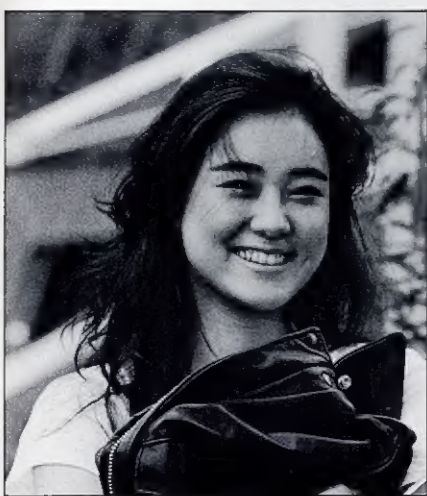
—大林監督はどんな監督だと思いますか？

原田　ひと口にいうと自分のお父さんみたいな監督ですね。大きくってドーンとしてます。

—スタッフについては？

原田　スタッフ全員が大林監督の映画だから現場に参加しているという感じです。皆さん仕事に燃えていて一致団結していますね。

—そういう現場になじめたのはいつ頃からですか？

原田　巧とミーヨが温泉の共同浴場で再会するシーンを撮ってからです。私のこの作品にかける意欲が皆さんに伝わったと思うんです。

原田　貴和子（はらだ　きわこ）
昭和40年5月21日、長崎県長崎市生まれ。昭和59年度ミスユニバース九州代表に選出される。高校卒業後、クラシックバレエの勉強をするために上京。映画出演は、日本・スイス・イタリア合作映画「アフガニスタン・地獄の日々」に女性ジャーナリスト役で出演。日本での実質的なデビューは「彼のオートバイ彼女の島」。風のような魅力をもつ美代子役で初主演を果している。また「キャバレー」にもゲスト出演している。レコードデビューは60年9月にBIRDSの一員として「二代目はクリスチャン」の主題歌を歌い、61年3月21日には、キャニオン・レコードより「彼のオートバイ彼女の島」の主題歌を発売予定としている。また、同曲は資生堂（シーズ）のイメージソングとしても決定している。

—原田さんにとってはそのシーンが撮影のヤマ場だったわけですね。

原田　そうですね。演るとはいったものの実際はすごく抵抗がありました。家族の前でも裸にならないのに50人余りのスタッフが殆ど男性なんです。カチンコが鳴った瞬間、あぁ私は女優なんだ、ミーヨなんだって自分にいい聞かせました。

—撮影中、一番うれしかったことは何ですか？

原田　ただもう夢中でがんばったのが温泉のシーンだったんです。そのシーンを撮り終えた時「よくがんばったね」と監督がとんで来てくださいました。ああ、やったんだなってホッとしましたね。で、その夜スタッフの皆さんから拍手されたんです。この時ほどうれしかったことはありません。がんばって良かったって思いました。

—映画のスケジュールの都合で、クランクアップしてから完成するまで半年の期間があったそうですね。

原田　ハイ、それは撮影の時から聞いていたことなんですが……とにかく毎日映画のことしか頭にないんです。完成作品の見れる日が近づくにつれて不安が増しました。気持ちに全く余裕が持てなくて、神経がピリピリしっぱなし。そんな私をこわがって、妹は全然話しかけてこなくなったんですよ(ウフフフ)。

—長い間待ち続けた完成作品を見て最初に感じたことは何ですか？

原田　試写室へ入ってスクリーンに映像が映し出される瞬間までは崖っぷちに立たされているような気持ちでした。そして、自分の演って来たこと全部の思い出を、かみしめながら見たんですよ。ああ、自分のやった通りのことが出てるなって……。見終わって、それまでの不安な気持ちが全てふっきれました。

—完成作品を見てから周囲の人と話をしましたか？

原田　妹に見てもらうのが一番楽しみで一番こわかったんですね。それで「すごく良かった」といってくれたのでホッとしました。この映画にはとても純粋な心が描かれているでしょう。「心が洗われるみたいね」って2人でいい合ったんですよ。

—主演デビュー作として皆サンに映画のどこを見て欲しいですか？

原田　ちょっと生意気かもしれませんが私を見て欲しいです。そして、ミーヨみたいな子がいたらステキだなって感じてくれたらうれしいですね。

—この映画にはミーヨの他にも3人の若者が登場しますね。原田さんはこの映画を何映画だととらえていますか？

原田　最初は4人の若者を中心とした青春映画だと思っていました。男と女がいてそれぞれ異性や同性に対する考え方が違っているんです。ところが何度も見ているうちにバイクも一生懸命演技しているようにも思えてきました。見る度に解釈のしかたが変わる映画なんですね。

—映画と同時に歌手としての活動も始まりましたね。

原田　主演作品の主題歌を歌えるなんてとてもラッキーです。この歌はメロディーも詞も好きなんですけど、特に詞が気に入っているんですよ。意味のわかりやすいキレイな詞が生きていると思うんです。特に「好きよ」というフレーズを歌う時、感情が高まって思わず力をいれてしまうんですよ。日本語っていいですね。

—そうですね。日本語の美しさを感じさせてくれる歌ですね。原田さんは歌手活動と女優業のどちらをメインにして行くのですか？

原田　役者としてやって行きたいです。でも今は勉強の時ですから与えられた仕事は何でも積極的にやってみようと思っています。どんなささいな役を演っても光っている……そんな存在感のある役者になれたらいいなぁと思うんですけどね。それと、日本人ですから着物の似合う女優になりたいです。

原田　貴和子

(インタビュー・構成　あくつ　みどり)

決闘の夜。「どんなことになっても文句なしだぞ。いいな」

退屈じゃないのは、

コオはプレスライダー。事件が起きると現場へ駆けつけて記者の書いた記事を速やかに社へ届けるのが任務だ。

物語

橋本巧(コオ)は音楽大学に通うかたわら、アルバイトで原稿の輸送屋をしていた。その彼の前に、先輩ライダーの沢田が詰め寄ってきた。妹の冬美とのただならぬ仲の責任をとれというのだ。

心の整理をつけるため、コオはバイクに乗り旅に出る。初夏の信州。ひとり気ままに走るつもりだった。だが、冬美との出来事を回想する彼の前にひとりの娘が現れた。不思議な透明感を漂わせる彼女のおかげで、コオはかえって気持をふっきることができた。

旅から戻り、沢田との決闘に勝ったコオ。冬美とは別れたが、そんな彼の心の中に、信州で会ったあの娘、美代子(ミーヨ)が自然にはいってきた。夏。コオはミーヨの故郷である瀬戸内の島を訪れ、数日を過ごす。2人の絆は確かなものとなり、ミーヨは東京へやってくる。行きつけのスナック「道草」では、

「お前が先に冬美に手を出したんだろう。責任をとれ」と，沢田はコオに激しく迫ってくる。

ミーヨの島へやってきたコオを，人々はあたたかく迎える。おりしも島は夏祭りの日。ミーヨの父，康一郎も上気嫌だ。

「俺とお前と2人きりになれる所へ連れていってくれ」コオはひとりで旅に出る。

オートバイだけなんだ。

祭りの晩。２人はともに心をうちあけ、互いの想いを語る。

コオの友人である小川と暮らすようになった冬美が歌手として実力をつけ、4人は「サンシャイン・ガール」を歌いながら、互いの連帯感を強めていく。

中型免許を取ったミーヨを連れ、コオはツーリングへ出かける。ミーヨは日増しにバイクの腕を上げ、はやく〝カワサキ〟に乗りたいと言う。だが沢田はコオに忠告する。「彼女を死なせたくなかったら、バイクからおろせ！」しかし彼女の決意は固く、ついにナナハン免許を手にしたとき、ミーヨはコオの前から姿を消した。

失意のうちに日々をすごすコオ。ある日、ミーヨから冬美のもとへ手紙が届く。「あなたへの手紙みたいだったわ、コオ。」「表に俺のCB400がある。彼女の島までひとっ走り行ってこい！」小川の言葉に、コオはうなずき、飛び出して行く……。

「彼女は天才的ライダーだ……死ぬぞ」沢田はコオに言う。

ミーヨはコオに連れられて「道草」へ。
コオの仲間ともすぐにうちとけていく。

ミーヨの到着が遅く、言いようのない不安を
覚えるコオ。「すげえ事故だったよな……」

「彼のオートバイ彼女の島」主題歌

彼のオートバイ 彼女の島

阿久 悠作詞／佐藤 隆作曲／清水信之編曲

きらめいて きらめいて
きらめいて きらめいて
眩しく
激しく きらめいて

あなたの胸の中に光る風があった
私を裸にするあたたかさと激しさと
好きよ そう云うあなたが
好きよ 後悔しないわ
私を抱きしめて

あなたの胸の上に白い地図があった
私を迷い子にする遠まわりとジグザグの
好きよ 見えないあなたが
好きよ 忘れはしないわ
私を追いかけて

きらめいて きらめいて
きらめいて きらめいて
眩しく
激しく きらめいて

あなたの胸の奥に眠る海があった
私をとりこにする大らかさとやさしさと
好きよ 無口なあなたが
好きよ 退屈しないわ
私を眠らせて

あなたの胸の襞に痛い棘があった
私を痛がらせる淋しがりと悲しさと
好きよ つめたいあなたが
好きよ 泣いたりしないわ
私をつかまえて

きらめいて きらめいて
きらめいて きらめいて
眩しく
激しく きらめいて

メッセージ

製作 角川春樹

人生が少しだけ視えていた20代の後半、私と片岡義男氏は、「退屈な大人になりたくない」と思っていたのだが、年齢だけは紛れもなく大人になってしまい、なんとなく照れくさく、なんとなく居心地が悪くなり、ある夏、私たちは瀬戸内海の船旅に出た。10年前のことだ。船長が堀江謙一氏だった私たちのヨットは、出発した翌日、引き潮のために、あっさりと暗礁に乗り上げてしまった。目的地があるようでない、気楽な旅だったので、たいして気にもとめていなかったが、なにしろ、世界的ヨットマンの堀江氏が船長を務めるヨットということで、ラジオでは思いもよらない大事故のように報じられた。

当事者にしてみれば、たまたま寄港した島で昼食をとっている間の、せいぜいハプニング程度であったが、あとで大げさな事故だと放送されていたことに、私たちの方が驚いた。その島が、片岡義男氏の長篇『彼のオートバイ彼女の島』の、白石美代子の島である。島は、美代子の姓に使われた白石島であった。

この頃、片岡氏は好んでオートバイを素材に小説を書いていた。例えば、『スローなブギにしてくれ』であり、『ボビーに首ったけ』である。だから、書名は、私たちの旅の記念となった。私は、片岡氏ほどオートバイが好きではなく、後年、大藪春彦氏の「汚れた英雄」を監督した時、私はあっさりと24針を縫う大事故を起こしてしまった。罰である。

片岡義男氏の小説に登場する女性は、だいたい冬服の似合う細めの美人だが、白石美代子は、夏の女である。こんないい女がいれば恋人にしたいと、片岡氏と話し合ったことがあるが、片岡氏もそう思うと答えたところから考えると、原作者も美代子のような存在とは出逢ったことがないらしい。

『彼のオートバイ彼女の島』の映画化を思いたって8年が過ぎた。その間、角川春樹事務所には、3人の女優が生まれた。薬師丸ひろ子、渡辺典子、原田知世である。だが、どうも私のイメージとは合わない。ある時、原田貴和子が私に会いたいと言ってきた。数年前、ある映画のオーディション会場で、私は彼女に会い、女優になることをすすめたのだが、その時は、あっけないほど簡単に断られてしまった。今度は、彼女の方から女優になりたいと言う。そんな決心を、行きつけのレストランで告げられた時、とっさに、彼女に白石美代子を演じさせてみようと思ったのである。

演出に当っては、妹の原田知世をスターに育ててくれた、大林宣彦氏に貴和子を大人の女優にして欲しいと頼み込んだ。20歳のデビューだ。今さらアイドルでもないと思ったからである。

信州の夏。スクリーンに緑の山と1台のオートバイ。夏のよく似合う女が歩き出す。女優、原田貴和子のデビューである。

角川春樹

昭和17年1月8日、富山県生まれ。角川書店社長。51年に角川春樹事務所を設立、映画製作に乗り出す。その大胆な発想とバイタリティあふれる行動力で「犬神家の一族」(51年、監督・市川崑)、「人間の証明」(52年、監督・佐藤純弥)など、次々と大ヒットを生んだ。57年には「汚れた英雄」(主演・草刈正雄、勝野洋)で初監督。オーソドックスな手法で、みずからの映画理論を実証してみせ、好評を博した。また、59年の夏には、ミュージカルシーンを盛り込んだ日本では画期的な「愛情物語」(主演・原田知世)をプロデュース・監督。その年の冬には薬師丸ひろ子主演、澤井信一郎監督による「Wの悲劇」が数々の賞を獲得。60年春には、角川春樹事務所創立10周年記念作品「早春物語」「二代目はクリスチャン」をプロデュースしたことは記憶に新しい。

映画製作者としても、また監督としても、その行動はつねに注目を集めており、日本映画界の話題の中心ともいえる存在である。

原田貴和子とカワサキRS・W3

村井　真郎

片岡義男氏の原作小説「彼のオートバイ、彼女の島」は、オートバイライダーのバイブルである。それは、運転する上での心得といった教本的な意味ではなく**オートバイを愛する者の心情**が限りなく吐露されているという意味でだ。オートバイに乗ったことのある人なら、一文一文に心をときめかせて実体験の記憶の中に、語り尽くせぬ、あの感覚を脳裏に甦らすことができるはずだ。そこには、吹いているはずのない風さえもが存在している。

　気にとめることもなかったオートバイというマシーンが、同氏のそれまでの小説を読むうちに心の中でエンジンをかけ始め、遂に「彼のオートバイ、彼女の島」を読み終えると路面を蹴って走り出した。胸の中に秘めておけなくなった自分だけのバイク、それを手にするため私は教習所通いを始めた。モーターサイクル・ショップに並ぶオートバイの中から選んだ一台が、真新しいナンバー・プレートをつけて目の前に現われた時の感激を忘れることはできない。以来、「彼のオートバイ、彼女の島」の冒頭の舞台となった信州をはじめとする五万余キロのオートバイツーリングで、私は数々の思い出を刻ませてもらうことができた。その一つ一つが、心のフレームの中で

見事な光彩を放ち、今も生き続けている。**オートバイは魔薬だ。**奥深く決して極め尽くせぬ魅力を持ち、いつも死と隣り合わせて微笑んでいる。

　原作の中で登場する**カワサキ650RS・W3**は血の通った一人の人物のように全篇を文字通り疾駆している。それを取り巻く、夏、夜のロード、雨、風、太陽といったオートバイには不可欠の要素の配置も実に的確で、今読み直してみても驚嘆に値する。それだけに、原作自体が完璧にビジュアルで、具体的に映像化することを躊躇させてしまう神聖ささえ持っている。読者一人一人の胸に焼きついた灼熱のイメージをスクリーンに描破することは、許しがたい行為にも思えてくるのだ。そういった意味でも、小説「彼のオートバイ、彼女の島」はライダーのバイブルなのである。

　それが、映画化された。

　「転校生」「さびしんぼう」といった青春映画の傑作を撮った大林宣彦監督がメガホンを握ったというにしても、ライダーにとっては心中穏やかならぬものがあった。**小説ではオートバイは主人公たり得ても**、映像化した場合、それが成功するとは思えない。きっと原作に溢れていたオートバイの魅力は削ぎ落とされているに違いない……。

　不安と期待の中で観た映画は、プロローグから堂々とW3の魅力を掲げていた。今は生産中止となってしまったイギリス的で伝統的重量感を持つW3のフォルムと、あの独特なエンジン音がスクリーンに再生させられていたのである。が、しかし、オートバイを圧倒する魅力が、他にあった。**原田貴和子の存在**である。

　原作のヒロイン、ミーヨそのものの屈託のない大胆にして繊細なイメージを、彼女はまるで自分自身の持って生まれたキャラクターであるかのように、自然な演技で圧倒し尽くしている。大人の世界に足を踏み入れつつも、

少女の初々しさを失わない女性の美しさを全篇に振りまいているのだ。アイドルにはない艶気をさり気なく爽快に表現する演技には、この映画が初主演作とは思えぬほどのおちつきと気品さえ感じられる。

オートバイに憧れる都会的女性の心理と、島娘の純な心、一見相反するようなキャラクターを内在する、ちょっとミステリアスな女性像は原作者の理想の女性像であると同時に、読者もときめきを感じる、かなり**非現実的な女性**だ。それだけに彼女を具象するシナリオは、原作のイメージが強烈だっただけに難しかっただろう。それ以上に、この映画の成功の是否を握ったミーヨのキャスティングには勇気を必要としたに違いない。原作の持つ**オートバイとミーヨという二つの魅力**を大林監督は、最も得意とする青春映画としてアレンジしてみせてくれた。オートバイというキャラクターを原作ほどホットに見つめるのではなく、**客観的、無機質的な**キャラクターとして作品の中に溶け込ませることで、ミーヨというヒロインを浮き彫りにしてみせた。これまでの大林監督作品を観れば当然という結果を、予想を越えた時限で、こともなげに成し遂げたのである。

大林監督は、この作品に主演するために今までスタンバイしていたかのような原田貴和子を、自分自身のミーヨのイメージにアレンジし、スクリーンに活写した。映画「彼のオートバイ、彼女の島」は、ライダーのようにオートバイを血の通った生物として見つめるのではなく、魅力的な女性の愛の対照として登場させることによって、オートバイに命を与えたのである。

しかし、**原田貴和子の伸び伸びした演技と、彼女の愛したオートバイのシュールな描写が**際立ったがために、ヒーローのコオを熱演した竹内力や、三浦友和、田村高廣といった、脇で主人公達を好サポートした役者陣の印象を完全に圧してしまった。客観的に分析してみると、それは脚本化された段階から計算されていたこととは思うが、スクリーンに写し出された作品は、演出家の想像以上にヒロインを強烈に印象づけたのではないだろうか。「彼のオートバイ、彼女の島」というよりは、「彼女のオートバイ、彼女の島」といった感じになった。だが、それは原作の本題を逸脱しているものではない。むしろ原作から受けたイメージの中で最も輝いていたヒロインの姿が、大林監督の胸の中で豊饒な花を咲かせ披露されたとみるべきであろう。冒頭の風呂のシーンでの圧倒的な原田貴和子の演技を観ただけでも、それは存分に感じられる。

一八八五年にドイツで産ぶ声を上げた今世紀の中で特筆されるべき発明品オートバイは、エンジンにおいて、2サイクルから4サイクル、気筒数もシングルからマルチへと変遷を重ね、百余年の間に格段のテクノロジー的進歩と、フォルムの終局的完成度をみせている。「アラビアのロレンス」の主人公となったトマス・E・ロレンスに代表される、多くのバイクフリークスの熱き声援を受け、オートバイは単なるマシーンとしてではなく、人間の五感に浸み込んでくるような**感情を持った生き物**として、ライダーに愛され続けているのである。

ライダーの操縦に鋭敏に反応し、フライング感覚さえ満喫させてくれるオートバイは、これまでにも幾多の小説や映画に登場し、ライダーにとどまらず多くの人に感銘を与え続けてきた。「**大脱走**」でスティーブ・マックイーンはトライアンフ・トロフィーバードを駆って、有刺鉄線がはりめぐらされたドイツの捕虜収容所から自由を求めて飛び出し、「**あの胸にもう一度**」ではマリアンヌ・フェイスフルが素肌に黒いツナギを着てディオニソスで命を散らし、「**イージー・ライダー**」ではハーレーVツインを操ったピーター・フォンダがアメリカのロードを血に染めるというように、映画だけでも幾つかの名シーンが記憶に残像を刻んでいる。

そして、日本では、ライダーのバイブル「**彼のオートバイ、彼女の島**」という小説が映画化され、カワサキRS・W3の雄姿と共に、ミーヨを演じた原田貴和子の美しい姿が、多くの若者の胸に熱く眠ることになるであろう。

（むらい しんろう・キネマ旬報編集部）

彼のオートバイ 彼女の島

挿入歌

題名のないバラード

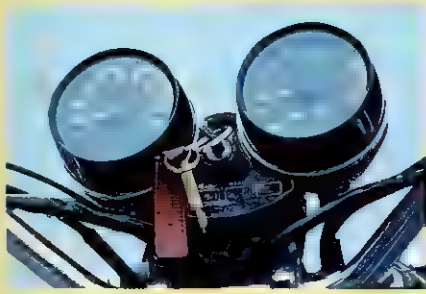
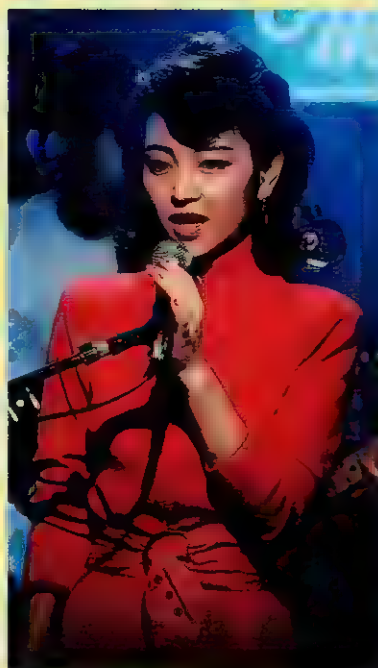
阿久　悠作詞／佐藤　隆作曲／宮崎尚志編曲

背のびした　頼りなさ
あなたに支えられ
案外に軽いねと
そのまま抱かれて

口紅の色を変え
短い爪にして
愛の日を書き記す
日記を買って来た

ブルーのインキが　にじんで悲しい
季節が変って　心も変る

あなたは　あなたね
私のものにはならない
私も私ね
あなたのものにはなれない

まぶしさは　ひとときで
いつしか　秋になり
やがてもう　木枯しが
手紙をひきちぎる

特別な思い込み
たがいに　たしなめて
愛のあるふりをして
躰を合わせてた

春には間がある　季節が淋しい
言葉が凍えて　こぼれて落ちる

あなたは　あなたね
私のものにはならない
私も私ね
あなたのものにはなれない

いま、無名性の映画を、めざして。

ヒーローと、ヒロインの、神話の再現を願う。

大林宣彦

—まず、主演の**原田貴和子**さんについて、どのような女優だとお考えでしょうか。

大林　二十歳になってからのデビューですから、アイドルでもタレントでもなく、はじめから大人の女優として出発しなければならなかった。日本の映画界の現状でいえば、それは珍らしいことですよね。そこのところはぼくも充分に意識して演出しました。アイドルの演出とは違うんですよね。で、彼女は非常に大柄な女優になれるスケールと、ひたむきさとを持っている。頭も気立てもいい娘だから、感情の理解がとてもいい。ぼくはほとんど、**「恋人」**のように撮りましたね。

—そうしますと、撮影は比較的スムーズに進んだと…。

大林　恋する悩みはありましたがね(笑)。

—原田貴和子さんと**原田知世**さん、二人の違いというのは、どういったところにあるとお思いになりますか。

大林　姉妹そろってぼくはデビュー作を撮ったわけですが、大好きなそっくり姉妹ですねえ。でも知世の場合にはアイドルとして出発したわけですから、こちらはぼくはほとんど**「妹」**のように撮りましたね。出発が違うということは、映画女優としてはまったく違う人生を歩んでいくわけですから、このデビューの年齢の違いが、決定的な違いとなっていくんでしょうね。

—原田貴和子さんはこの作品で、**渡辺典子**さんと対照的な役を演じたと思いますが。

大林　渡辺典子とは前から一度仕事をしたいと思っていて、角川さんにお願いしてね、脇役だけど理想的な配役が組めた。典子という娘はこれまで主演ばかりでしょう。それが今回は陰にまわるのだから、それで翳りという味わいが出た。主演をやっているときには出せない、切なさというのかな。

—意識的にこれまで彼女になかったものを引き出そうとされたわけですね。

大林　ぼくの想いの中の渡辺典子ですね。

—女優としても、二人は対照的だとお思いになりますか。

大林　どうでしょうね。でも今回はそれが狙いですからね。ただ本質的には、役柄はむしろ逆だったんでしょうね。けれどもキャスティングというのは、**実像がいかに虚像と出会うのか**という工夫が勝負ですから、逆であるというのもまた狙いなんですね。

—ところで、**竹内力**さんをどうしてもこの作品に起用したかったという理由をお聞きしたいんですが。

大林　彼自身がね、オートバイにまたがって東京へ来てみたらこの役に出会ったという、**ヒーロー伝説**を持っていること。それと、もう会ったとたんに、あっコオがいた！　彼しかいない、これは直感でしたね。

—実際に撮影を終えられて、やはり竹内さんで良かったと。

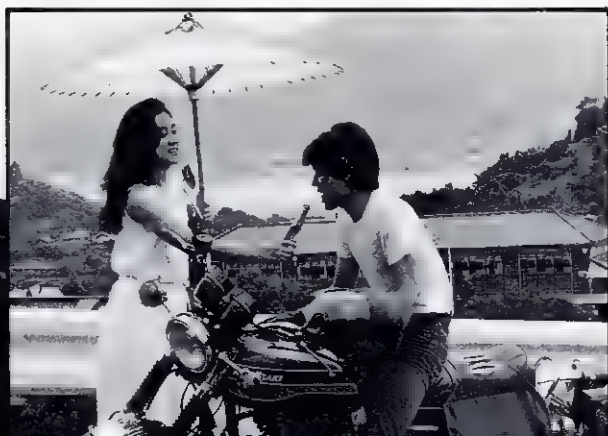
大林　彼しかいなかったでしょうね。この映画のためにこの世に存在していたとしか、いいようがない。俳優としても良いものをたくさん持っていますから、ぼくの次の《野ゆき山ゆき海べゆき》にも続いて起用しました。

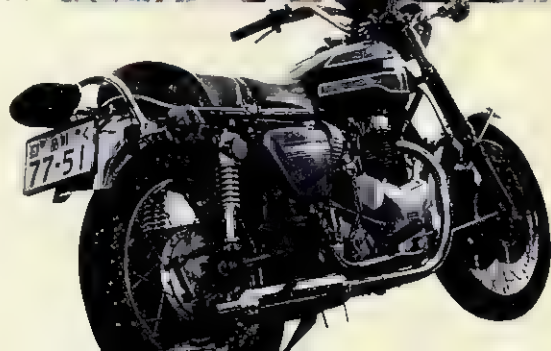
—**片岡義男**さんの原作と、監督ご自身の若い頃の体験が重なる部分というのはあるんでしょうか。

大林　片岡義男と大林宣彦というのは、一見、無縁のようですね。ただね、1960年代、アメリカという国が失速状態になった。文明は退廃し、都市の風は止ってしまった。ハリウッドの夢もフロンティア・スピリットの活力も、すっかり失われてね。その頃、ロサンゼルスにヒッピーが誕生し、それに呼応するように**アンダーグラウンド・ムービー**が生まれた。16ミリの小型キャメラを持ち、オートバイにまたがった若者たちが一斉に映画を撮り始めた。**自らが走って、風になろう**、病んだ国土から、自分たちの手で回復させよう、そういう願いをこめた、それは運動だったんですね。その頃ぼくもロサンゼルスやサンフランシスコにいて、そうした若い映画人たちと、親しく映画の未来を夢見ていた。あのピーター・フォンダとデニス・ホッパーの**《イージー・ライダー》**

大林宣彦
昭和13年1月9日、広島県尾道市生まれ。日本個人映画史の創成期に携わり、後にTVコマーシャルフィルムの演出家となる。CM作品にはチャールズ・ブロンソン、山口百恵など、映画スターを起用したものが多く、その数は約2，000本を超える。52年「HOUSE・ハウス」で劇場用商業映画に進出、これまでにない特撮を駆使したファンタスティックな映像で注目を集める。その後、「ねらわれた学園」「転校生」「時をかける少女」「天国にいちばん近い島」などで若手俳優を起用、甘ずっぱい青春を描き、映画少年少女より圧倒的支持を得る。59年「少年ケニヤ」ではアニメの演出も手がけ、多彩な才能を発揮。その他の作品には、58年「廃市」、60年「さびしんぼう」、未公開「四月の魚」などがある。

だって、実はアンダーグラウンド・ムービーの仲間が協力してつくり上げたんです。オートバイ映画というのは、だから当時の回復願望をこめた映画群の、いわばシムボルだったわけで、その頃の**オートバイの疾走感、風を呼び起す力**を実際に信じ、体験した映画作家は、日本ではぼくよりいないだろう、そういう自負はあります。ぼくが片岡さんの原作から読み取ったテーマは、一点、この**回復願望**、そこにこそ**友情**を感じたわけです。現在、片岡さんの小説はベストセラーだし、ファッションともなっている。でもこの原作をファッショナブルに撮ろうという考えはまったく無かった。むしろできるだけそういう装飾をそぎ落して、**ゼイ肉の無い映画**をつくりたかった。同じ意味で、片岡さんの小説を映画にする場合、そのあまりの軽さにとまどって、何とか別のドラマをくっつけて重力を増そうとする。関本郁夫さんのシナリオでも、例えばミーヨが妊娠して堕ろして、というエピソードがドラマチックに工夫されていた。でも結局、そういうドラマも加えるのは止めました。ここには回復願望という強い意志が、主題がある、それで充分じゃないかと。撮影中もずっと、シナリオと同時に原作の文庫本をポケットに入れていた。いわば関本版《彼のオートバイ、彼女の島》と片岡版《彼のオートバイ、彼女の島》との**対話の中から**、大林版《彼のオートバイ、彼女の島》が生れた、という構造の映画です。アンダーグラウンド・ムービーも日本へ来ればアングラという風俗になってしまったけれど、片岡義男もまたこの国ではちょっとシャレた風俗になりかねない。その中から、キラリと光る作家の魂とでもいうべきものを、ぼくは抄い取ってみたかった。いわば、それが**青春**というものじゃないんでしょうか。**輝やいているがゆえに、痛い**。その痛みをね、今回は出してみたかった。で、そこから今回のぼくのテーゼ、**「無名性の映画」**という発想が導かれてくるのです。これは、いわば**無名のヒーローとヒロインの物語**なんです。その点、原田知世は華やかなアイドルとして輝やかしくデヴューするわけですが、原田貴和子は無名のヒロインとして、痛みの象徴として存在し得る。竹内力もまた無名のヒーロー伝説を持つ。そこからこの映画の戦略が始まるのです。

アンダーグラウンド映画の運動の大きな主題のひとつに、映画をエジソンに戻す、という主張がありました。あまりにも肥大して無力となったハリウッド映画から**あらゆる虚飾をそぎ落す**。映画は、その**原点に戻ろうと志したのです**。そのシムボルのひとつに例えばハムフリィ・ボガートの若い日のポートレートも掲げられました。それはいわば、活力にあふれた無名の映画群のシムボルだったんですね。かつては、今ぼくが思い起そうとしても、題名もスターの名前すらも、もちろん監督の名前などちっとも思い出せない、**「スリムでタイトでセクシーな」**映画がいっぱいあったんです。無名のヒーローとヒロインが夢見る愛と冒険の世界。それが**映画的神話**を形成していく。そんな映画群の中の一本に、この映画を参加させてみたい。それは**映画自身の回復願望**にもつながるか知れない。ぼくが原田貴和子と竹内力に求めたのは、そういう**けなげな無名性、その活力**だったんです。だから冒頭のお風呂のシーンなんか象徴的でね、この片岡さんの原作はどこか古典的、神話の世界だとぼくは思うんですが、それは例えば、味わいはまったく違うけれども川端康成の、**《伊豆の踊り子》**ね、**ひとつの典型**としての古典的共通性がある。**愛の神話**というね。で、《伊豆の踊り子》でいちばん大切な場面は、踊り子がお風呂にはいっているところなんですよ。お風呂の中で素裸になって、こっちを向いて、伸び上って、手をふるんです。その姿を見て、主人公が、ああ彼女はあんなにも子供なんだ、まだ性も何も持っていない子供だったんだ、と心を洗われたような美しい気持になるという、とても大切なシーン。ところがこれが映画化されると、まずそこのところを避けて通ってしまう。多分踊り子を演じて来た俳優さんが、結局はいつもその時代のアイドルたちであったという事情もあるんでしょうがね。**《潮騒》**の、焚き火を飛びこえて来い、というあの有名なシーンもそうですよね。**ヒロインの裸身**無くしてはあの**清冽**な

抒情というものはとても醸造できない。で、今回のお風呂の出会いも、裸であることの羞恥心が出てはいけない、裸でそこにいるのがあたり前に描かなくてはいけないんですね。で、羞恥心ではない、ということは、隠してはいけない。いってみれば、スポーツの選手が何かスポーツをしているように撮らなければならない。あっけらかん、と明るく、**生命力、自由、そのものにね**。ただそれでも演じる側の俳優さんには当然羞恥心があるわけですから、そしてまた羞恥心の無い人がこれをやったのでは感動も何も無いですから、やはり**処女性**というのは最重要です。となると、原田貴和子は、まさに理想のヒロインとしてそこにいるわけですが、非常なけなげさでもって**その肉体を奉仕**しなければならない。これが例えば「妹」原田知世ではやらせられなかったでしょうね。けれども「恋人」原田貴和子にはぜひ挑戦させてやりたかった。そして貴和子はやりとげました。しかもクランク・インして、すぐにね。この場面が冒頭にあればこそ、その後のミーヨはすべて**裸の心**が見える。いわゆる魂が、高貴な、高潔なといってもいい、魂が見えてくる。映画というのは、**俳優の肉体を写しながらその心を見せ**なきゃならない。原田貴和子のお風呂のシーンへの挑戦と成功とが、間違いなくこの映画の回復願望という主題を魅力的にしかも力強く、伝えることを可能にしたと思いますね。ぼくは心から貴和子をほめてやりたい。誇らしく思いますよ。こうして、本当はこの映画の中にすらいなかったのか知れない、主人公の**願望の中に**だけいた、**ひとつの心の状態**の、その象徴としてのミーヨという少女、風のような、肉体を持たない自由な魂のミーヨという存在は、彼女がけなげに肉体を賭けて成功したがゆえに描ききれたのだと思っています。無名性の勝利でしょうね。

　そして竹内力もまた、彼の表情の中からはかつてのさまざまな無名のヒーローたちが見た夢の数々を彷彿とさせてくれます。彼の行動を通していつか皆が心に描いた**夢と願望**とを見ることができる。こうしてこのヒーローとヒロインとのけなげな無名性のゆえにこそ、《彼のオートバイ、彼女の島》の物語は、ひとつの神話ともなり得るのですね。

　この映画の中で有名なのはもちろん渡辺典子であり、**高柳良一**であり、二人とも角川映画の主演スターです。彼らが脇にまわることで無名のヒーロー、ヒロインにリアリティが出る。**虚構のリアリティ**というね。典子も高柳もとてもいいと思うんですよ。高柳君はこれで引退してしまうんだけれど、角川のスタ

ーであって、大林映画のヒーローばかりを務めて来た彼には、本当はここから出発して欲しかった。ようやく俳優として、所を得たという思いがぼくには非常にあるんですがね。ともかくこうして無名のヒーローが夢を語り、有名のヒーローが味わいを増強した。となると、**三浦友和**、**田村高廣**という大スターの登場はもう大贅沢というべきで、こういう思いがけない贅沢というのがまた無名の映画を見る楽しみのひとつでしてね。しかも、それじゃ**本当の主役は何かというと、これはもう、オートバイ**なんですから、ええ、オートバイは、キッチリ描いたつもりです。ぼくはじつは馬乗りでしてね、アメリカへよく渡ったというのもあの広大な土地を馬で旅してみたくて。で、オートバイというのは機械時代の馬だと思うんです。あれはまさに回復願望のシムボルです。それなのにオートバイというと青春の暴走のシムボルのようにしか捉えない日本映画には、ぼくは心底腹が立ってましてね、だからこの映画では、**オートバイの心、オートバイに託したぼくの心**というものを、大切に描いてみたつもりです。最も無名性のヒーローというのが、オートバイであったわけですね。で、今それが走り出すとなると、もう映画監督といういちばん有名であるべき存在が最も無名性を持ってくる。この映画にいちばん必要な構造は、そこですね。で、ぼくは、この映画に関しては、**作家は寡黙であるべきだ**というコンセプトを持っています。饒舌であってはいけないのだというために今は饒舌になっているんでね(笑)。寡黙であるというのはいわば意志の表明ですからね。上映時間一時間三十分、**マイナスヒトコマ**。削ったヒトコマというのはそこに主張があるわけでしてね。これは無名のプログラムピクチュア。ぼく自身も観客のひとりとなって映画館の暗闇の中で「**それで、どうなんだ!**」とひとりひとりに問いかけてみたい。これが作家としての挑戦です。

これは角川十周年記念作品《キャバレー》の併映作で、つまりB面のブルースというのかな。「B面のブルース、一時間三十分マイナスヒトコマの挑戦、無名性の映画」ってところがこの映画のコンセプトじゃないかな。そういう条件を、ぼくはいわば**文体**としたんですよ。技術的にいえば全篇を動くキャメラで撮っています。エレマックというアメリカ製の移動機械にキャメラを載せて、キャメラは決して大地に置かない。**キャメラが風になって人物と共に走る**。B級映画の典型のキャメラワークです。またカラーとモノクロームのフィルムを共用してますが、これも意図的にではなく恣意的にね。使い方に、例えばモノクロームは過去、カラーは現在を表わすといった意味は無い。むしろ夢の論理というのかな、勝手に色がついたり消えたり、**夢色の映画**ですね。そして作家は寡黙に、つまり、ハードボイルドにね。この映画は観客がいて、初めてヒーローはヒーローに、ヒロインはヒロインに、そして作家もまた作家になるだろう。そういう映画でしてね。その点、ぼくのいつもの映画のように、主観的にぼく自身を語るということは無い。**尾道三部作**などとはちょっと違った映画ではあるでしょう。

—お客さんにもそういうところを分ってもらいたいと……。

大林 いや、もうぼくを離れて楽しんでもらえればいい。ただ、**ハードボイルドとは本質はセンチメンタル**なもんでしてね。こういう戦いを共にやってくれた仲間たち、そして見てくれる観客を含めてね、やあ、見事にハードボイルドをやってくれたね、とね、センチメンタルな友情を感じてるんですよ。一本の映画をつくりあげたばかりの作家の心情というのはね、まあそういったもんです。想いは数々あれど、ぼくもまたオートバイにまたがって、いまはただ、**風になりたい**。………

2月24日 早稲田・アバコスタジオにて

この映画を演って初めてライバル意識というものを実感しました。思いがけない自分を発見した気がします。

—原作（片岡義男文学）はいつごろ読んだのですか？

竹内　本が出版されてすぐぐらいに読みました。こういう仕事をするようになるとは思ってもみなかった頃です。オレはバイクが好きだし片岡さんの小説ではこれが一番気に入ってましたね。

—片岡文学の映画化作品は見たことがありますか？

竹内　「メインテーマ」と「湾岸道路」を見たんですがオレのイメージとは少し違いました。偶然ですが役者になる前、この小説が映画化されたらどんなふうになるのかって思ってたんですよ。

—初めての映画出演で大役を務めた感想を聞かせてください。

竹内　オレはやるぞ!!っていう気持ちはすごい強かったけど、役柄を意識したりすることは全くなくて……自分の地のままで出来た気がします。ただ全てが初めての経験で何もわからなかったから、がむしゃらに演っていたところがありますね。

—撮影初日は緊張しましたか？

竹内　オレ神経がズブトイから別に何ということもなかったですね。映画の撮影が始まったっていう実感がなくてボーッとしている間に終わりました（ハハハハハ）。

—橋本巧という役柄にはすんなり入れましたか？

竹内　原作での巧に対してはあまり親近感を感じなかったけど、台本を読んだ時はすごく自分に近いものを感じました。だから最初っから自分そのもの。ごく自然に入れました。多分オレと全く性格のちがう役だったら、芝居やるのに考えちゃっただろうし、メチャクチャになっていたかもしれませんよ。はまってたんだと思う。

—撮影中、どんな点に苦労しましたか？

竹内　台本は何百回も読んだから全部暗記して撮影が始まったくらいなんです。でも、現場でかなり変更があったんですよね。言葉を憶えることには苦労しなかったけど、アクセントやイントネーションがね……東京に出て来てまだ4、5ヵ月しかたっていなかったから、ちょっと気をぬくとすぐに方言が出ちゃうんですよ。だから、その点が不安でした。スタッフの人に「あの、これでいいんですかね」なんて、いちいちセリフを聞いてもらってたしかめましたよ。

—竹内さんにとって撮影が一番むずかしかったのはどんなシーンですか？

竹内　何でもないようでバイクに乗って走るシーンがむずかしかったですね。カメラを意識しながら走らなきゃいけないでしょう。都内の道を走る時なんて周りに他の車も走ってるしね。あとは……オレというより貴和ちゃん（原田貴和子）の方がいろいろ大変だったと思う。女の子でしょ？　温泉のシーンの時本番中は声出して応援なんかできないから、心の中で『がんばれよ』って叫んでましたよ。オレは男だし、そう何でもやりまっせ!!って感じで演ってたからね。

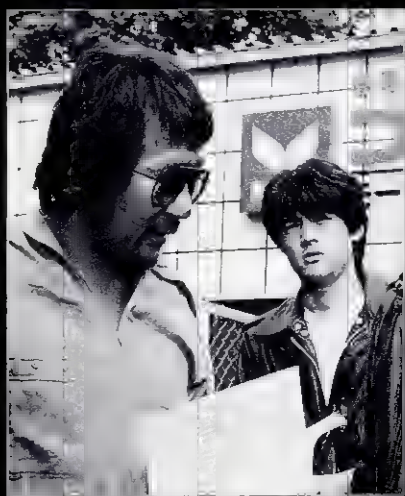
—初出演の相手役が原田貴和子さんだったわけですが……。

竹内　年齢も同じだしお互い初めて同志だったから、すごく演りやすいパートナーだったです。初めて会った時の印象はおとなしそうな子に見えました。オレ、本当に無口な子だったらまいっちゃうなあって思ったんです。でも実のところはちゃんと自分の意見をきちっといえる人でしたね。

—ライバルとして考えた場合は？

竹内　力（たけうち　りき）

昭和40年1月4日、大分県生まれ。本名は竹内力（ちから）。高校卒業後、サラリーマン生活を経て、役者をめざす。180cmの長身で、サッカー、剣道をこなす。
映画は本作品がデビュー作。その後、大林監督作品「野ゆき、山ゆき、海辺ゆき」や角川春樹監督による「キャバレー」にも出演している。またTVでは「赤かぶ検事奮戦記」「セーラー服通り」「ヤヌスの鐘」などがあり、今後もますます活躍が期待される大型新人である。

竹内 力

竹内　自分のことで精一杯なところがあったから彼女をライバルとして考えたことはなかったんじゃないかなあ。女の子だしっていう目で見ちゃいますからね。同性だったら違ってるだろうけど。

—共演者といえば、高柳良一さんについてはどうでしたか？

竹内　高柳さんに対してはどこかで負けらんないって思った時がありましたよ。彼とのからみのシーンで彼の存在感をひしひしと感じる度、負けたくない負けられない。みたいなところがあったな。うん、正直いっちゃうとそういう気持ちがありましたね。

—撮影中、うれしかったことは？

竹内　けっこう自分が思っていたように演れたことですね。撮影前に監督のところへいって質問するんです。ここはこういうふうにしようと思うんですがって。そこで監督が「うんそれでいい。力（リキ）の思ったようにやってごらん」ていわれるとうれしかったなあ。多分、他の監督だったらこんな話もできなかったかもしれないと思うんですよ。

—大林監督はどんな監督でしたか？

竹内　ウ〜ンそうだなぁ。心のどっかにオヤジみたいに思う気持ちはありますね。大らかで親近感のある監督だと思いますよ。

—クランクアップしてから完成作品を見るまで、ずいぶん時間がありましたよね。

竹内　そうなんですよ。クランクアップしたばかりの頃は気になりましたね。いつ完成するんだろうって。でも、時間がたつにつれて他の仕事もやってるわけだし考えてもしかたないって思うようにしました。オレはやるだけやったんだからってね。楽天的に完成作品を楽しみにしようと心がけたんですよ。その方が前むきでしょう。早く見たくてしかたがなかったけど。

—待ちに待った初号を見てどうでしたか？

竹内　あの1時間30分はあっという間でした。もの足りない気がしましたね。30分ぐらいにしか感じなかった。多分自分ばかり気になって、全体を見れなかったからだと思います。スクリーンの中の自分を見て、わぁくさい芝居してるって思ったんですよ。テレくさかったですね。いやに若い自分がいるって思いました。そこが新鮮な気もしたりして。

—この作品がデビュー作になるわけですが、皆サンに一番見て欲しいところはどこですか？

竹内　全体を見て、そしてオレを見て欲しい。デビュー作としてすごく自分らしさが出ている作品です。細かいことをあげればきりがないけどイイ映画なので満足ですよ。

—例えていえばこの作品は竹内さんにとって何映画として解釈しますか？

竹内　青春映画ですね。ドロドロしたドラマが多い中で最近には珍しい純粋な青春映画。これ、いろんな人に見てもらいたいです。年輩の人が見て、青春時代を思い出してくれたらうれしいです。

—竹内さんはいつもバイクに乗っているそうですね。バイクは竹内さんにとって、どんな存在ですか？

竹内　恋人じゃないけど足だとは思いません。大好きですよバイクは。自分のマシンは大事にしてます。いつもシート・カバーを持ち歩いてるし。

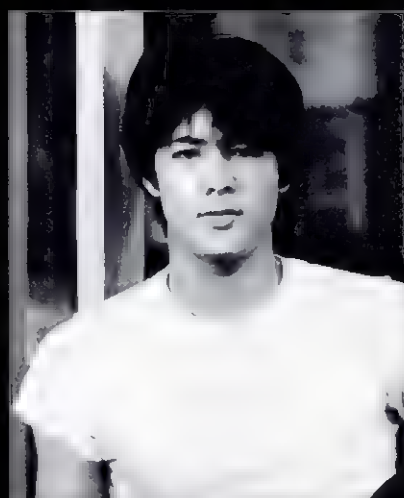
—東京に出て来る時もバイクだったとか。

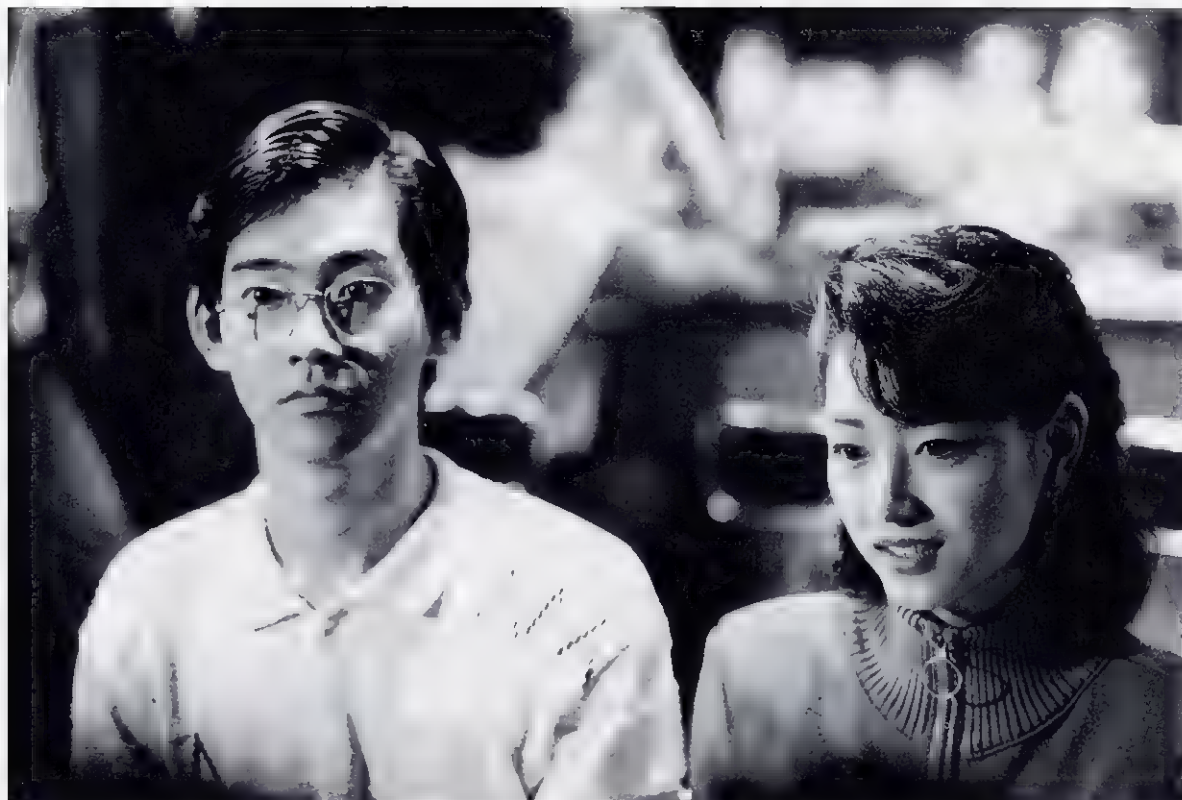
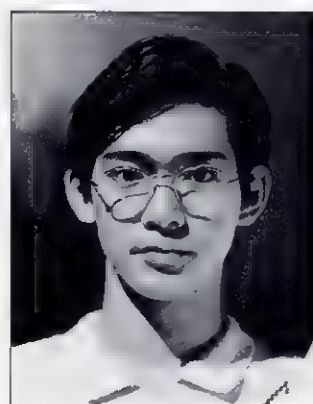
竹内　ええ、こちらへ出てくる3週間前に買って新品に乗って来ました。ずっとバイクが欲しくてね。働いて貯めた金を全部つぎ込んで買っちゃったんですよ。

—カワサキW3の乗り心地はどうでした？

竹内　最高!!　オレのホンダNV400なんて比べものになりません。また乗りたいなあ。

—竹内さんは今後、俳優業に専念するのですか？

竹内　まだわかりません。機会があれば歌も出したいです。今回の仕事ですっかり映画に魅せられてしまいました。またぜひ映画の仕事をやりたいです。

（インタビュー・構成　あくつ　みどり）

プロフィール

田村　高廣

昭和3年、京都府生まれ。故阪東妻三郎の長男。三人の弟のうち二人が俳優であることはよく知られている。映画、TVの出演作品数は枚挙にいとまがなく、舞台でもスクリーン同様安定した演技で好評。地味な役どころが多いがこの作品でもぴったりの配役である。

三浦　友和

昭和27年、山梨県生まれ。49年に「伊豆の踊子」で映画デビューして12年め。もうベテランの域に達したと言ってもよいだろう。52年の「HOUSE　ハウス」で初めて大林宣彦監督に起用された。映画、TVともに出演作は多く、今回も落ちついた演技を見せている。

高柳　良一

昭和39年、東京都生まれ。56年公開の角川映画「ねらわれた学園」のオーディションで、ヒロイン薬師丸ひろ子の相手役に選ばれデビューを果たす。以後、58年「時をかける少女」59年「天国にいちばん近い島」で原田知世と共演。昨年の「友よ、静かに瞑れ」ではそれまでとは違った役柄を好演した。

渡辺　典子

昭和40年、大分県生まれ。'82年角川映画大型新人女優募集」において優勝。57年「伊賀忍法帖」をデビュー作に、58年「積木くずし」59年「晴れ、ときどき殺人」「いつか誰かが殺される」60年「結婚案内ミステリー」で主演。着実に女優としての力をつけてきた。TVでも活躍している。

CAST

原田貴和子
渡辺　典子
竹内　力
高柳　良一
田村　高廣
（特別出演）
三浦　友和

根岸　季衣
峰岸　徹
尾崎紀世彦
中　康次
山下　規介
望月　真美
小林　稔侍
泉谷しげる
新井　康弘
柿崎　澄子
掛田　誠
小林のり一
タンクロー
川村　昌弘
林　優枝
大山　大介
中川　竹明
栗田　恭子
佐藤　エリ
青島　健介
平川　紀子
舛田麻由美
二階　健
福岡　保子
宮崎　順二
大蔵　弾
坂本　雅哉
野々山ゆかり
牧山　景一
川野　貴章
百瀬　由美
伊藤　伸一

石上三登志
（語り）
尾美としのり
小林　聡美
岸部　一徳
入江　若葉
（友情出演）

STAFF

製作　角川　春樹
原作　片岡　義男（角川文庫版）
脚本　関本　郁夫
監督　大林　宣彦
プロデューサー　森岡　道夫
　大林　恭子
撮影監督　阪本　善尚（J・S・C）
美術デザイン　薩谷　和夫
音響デザイン　林　昌平
照明　高野　和男
録音　稲村　和巳
特機　大島　豊（NK特機）
カメラ・オペレーター　志満　義之
記録　黒岩美穂子
ヘア・メイク　岡野千江子
衣裳　山田　実
スタイリスト　えなみ真理子
編集　大林　宣彦

カー・スタント　高橋レーシング
　高橋　政生
　高橋　義浩
　高橋　昌志
助監督　内藤　忠司
演出部協力　小倉　洋二
製作担当　飯田　康之
音楽監督　宮崎　尚志
主題歌「彼のオートバイ、彼女の島」
作詞　阿久　悠
作曲　佐藤　隆
編曲　清水　信之
唄　原田貴和子
企画・制作　角川レコード
発売　キャニオンレコード
挿入歌「題名のないバラード」
作詞　阿久　悠
作曲　佐藤　隆
編曲　宮崎　尚志
「サンシャイン・ガール」
作詞　阿久　悠
作曲　佐藤　隆
編曲　宮崎　尚志

「風の歌」
作詞作曲　大林　宣彦
編曲　宮崎　尚志
音楽プロデューサー　石川　光
音楽録音　岡部　英雄
効果協力　スワラプロ
　伊藤　克己
宣伝　斉藤　隆司
製作宣伝　伊藤　賢治
　櫻井　弘道
スチール　芳賀　雅義
　久井田　誠
凝斗　西本良治郎（J・A・C）
振付　小林　親一
刺青　栩野　幸知
写真提供　細越麟太郎
〝サンセット・ヒルズ・ホテル〟
製作主任　市川　幸嗣
監督助手　中村洋二郎
　中村　明
　佐藤　隆之

撮影助手　岩松　茂
　紫主　高秀
美術助手　正田俊一郎
　酒匂　道弘
装飾・小道具　田中　良直
　秋田谷宣博
　戸沢　哲志
　石田　満美（たぬき工房）
照明助手　中村　裕樹
　豊見山明長
　市川　元一
　川井　稔
　田村　文彦
　水野　良昭
録音助手　橋本　高樹
　人見　章久
　上村　利秋
　阿部　幸男
　岡沢　賢
特機助手　実原　康之
　佐々木雅史
スタイリスト助手　田中貴美子
　山口　富美
ポジ編集　戸嶋志津子
ネガ編集　川岸喜美枝
製作進行　斉藤　寛
　岩崎　敬道
セカンド・ユニット・アクション・クルー
ディレクター　山名　兌二
撮影　住田　望
照明　石垣　悟
記録　石田　芳子
助監督　吉田多喜男
　辻井　孝夫
製作主任　鎌田　賢一
撮影助手　山縣　昭二
　鈴木　悟
　和泉　敏雄
ヘア・メイク　杉浦　育代
製作進行　中川　克也

DOLBY STEREO ™
一部上映館を除く

車輌　日本照明
タイトル　白組
録音スタジオ　アバコ・クリエイティブ・スタジオ
現像所　IMAGICA

協力
日本映機㈱
広島県尾道市
向島町
世羅町
向島のひとびと
クロキプロ
KOMINE AUTOCENTER
㈱コミネオートセンター
東海楽器
登山とスキー 専門店 池袋秀山荘
EIKO青山本店
GRASS MEN'S
JUN SAITO
日本サイクルスポーツセンター
共同通信社
軽井沢 COW-BOY HOUSE
法師温泉 長寿館

解説

発売以来、若者たちを魅了しつづけている片岡義男の世界が、製作・角川春樹、監督・大林宣彦という、日本映画においては最高ともいえるコンビの手によって完成した。全編、オートバイの疾走感あふれる、抒情に満ちた作品となっている。

爽やかな風が吹く初夏の信州。ひとり、オートバイに乗って旅立った男の前に、風のように現れた女。都会の雑踏の中、そして瀬戸内の島での日々を通じて、いつしか二人は結ばれていく。やがて季節は再び夏へ。女は「風がとまったみたい」と言葉を残して、〈彼女の島〉へ帰ってしまう……。

日本映画初主演の原田貴和子が、不思議な魅力を持つ女・ミーヨを好演、恋人役のコオには、新人、竹内力が全力で取りくみ、バックを固めるベテランたちの中にあって、ともに見事なデビューを飾っている。

この作品を一言で表現するなら、「60年代のノスタルジアをオートバイ・島という抽象的な物に置き換えて描いた映画」と大林監督は語っている。

昭和61年4月25日印刷
昭和61年4月26日発行
発行所　東京都千代田区有楽町1－2－1　東宝 出版・商品販促室
発行者　東京都千代田区有楽町1－2－1　大橋雄吉
発行権者　東京都千代田区九段北2－3－2　株式会社 角川春樹事務所
印刷所　東京都港区芝2－1－28　成旺印刷株式会社
定価三〇〇円

片岡義男の本

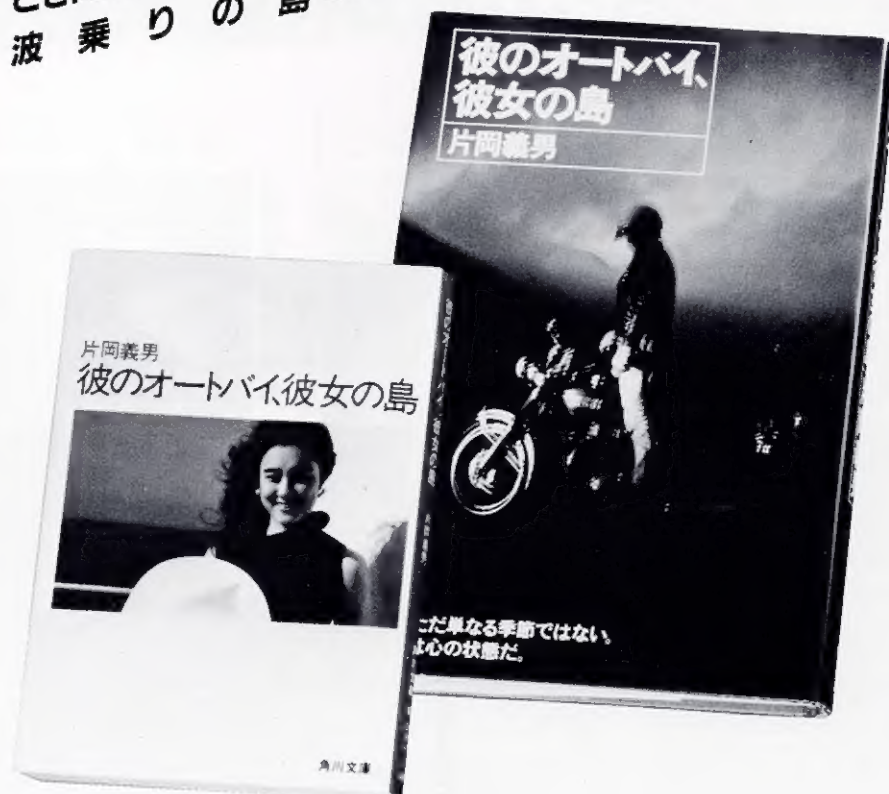
文庫本

書名	定価
ぼくはプレスリーが大好き	定価380円
スターダスト・ハイウェイ	定価340円
ロンサム・カウボーイ	定価380円
スローなブギにしてくれ	定価380円
マーマレードの朝	定価380円
アップル・サイダーと彼女	定価340円
ラジオが泣いた夜	定価420円
人生は野菜スープ	定価420円
彼のオートバイ、彼女の島	定価380円
味噌汁は朝のブルース	定価420円
ボビーに首ったけ	定価380円
コーヒーもう一杯	定価340円
幸せは白いTシャツ	定価420円
ときには星の下で眠る	定価420円
波乗りの島	定価420円
いい旅を、と誰もが言った	定価380円
町からはじめて、旅へ	定価340円
友よ、また逢おう	定価340円
最終夜行寝台	定価460円
限りなき夏 I	定価340円
吹いていく風のバラッド	定価260円
夕陽に赤い帆	定価380円
俺のハートがNOと言う	定価460円
and I Love Her	定価300円
ターザンが教えてくれた	定価300円
Ten Years After	定価300円
美人物語	定価380円
ドライ・マティーニが口をきく	定価380円
一日じゅう空を見ていた	定価490円
湾岸道路	定価460円
缶ビールのロマンス	定価340円
彼女が風に吹かれた場合	定価340円
B面の最初の曲	定価340円
ふたり景色	定価260円
誰もがいま淋しい	定価300円
ボビーをつかまえろ	定価300円
寝顔やさしく	定価260円
心のままに	定価260円
すでに遥か彼方	定価340円
5Bの鉛筆で書いた	定価300円
彼女から学んだこと	定価460円
ふたとおりの終点	定価340円
彼らがまだ幸福だった頃	定価460円
メイン・テーマ1	定価380円
メイン・テーマ2	定価380円

カドカワノベルズ

書名	定価
彼女が風に吹かれた場合	定価640円
メイン・テーマ①	定価640円
メイン・テーマ②	定価640円
メイン・テーマ③	定価600円

単行本

書名	定価
スローなブギにしてくれ（第2回「野性時代」新人文学賞受賞）	定価980円
いい旅を、と誰もが言った	定価980円
波乗りの島 ―ブルー・パシフィック・ストーリーズ―	定価1100円
友よ、また逢おう ―ビリー・ザ・キッドの伝説―	定価960円
彼のオートバイ、彼女の島	定価980円
人生は野菜スープ	定価980円
湾岸道路	定価980円
対談 昨日を超えて、なお… 小林信彦・片岡義男	定価780円

角川春樹事務所作品・東宝配給「**彼のオートバイ彼女の島**」主題歌

彼のオートバイ彼女の島

原田貴和子

作詞：阿久悠　作曲：佐藤隆　編曲：清水信之　B/W：「彼のオートバイ彼女の島」挿入歌　題名のないバラード　7A0566　¥700　**3月21日発売**

•

角川春樹事務所作品・東宝配給

彼のオートバイ彼女の島〈オリジナルサウンドトラック〉**4月21日発売**

LP：C28A0487　¥2,800　TAPE：28P6527　¥2,800

RECORDS KADOKAWA

PONY CANYON

明るい洗顔力です。

とりもなおさず、モイスチャーバランスを気にすると、肌のタイプとメークの度合いにあわせた洗顔料が必要です。だからシーズは3タイプ。よごれをしっかり、すばやく落とし、素肌をおだやかにととのえます。

●洗顔フォーム120g・600円 65g・400円(医薬部外品)●洗顔ローション150mℓ・800円(医薬部外品)●クレンジング・マッサージ120g・800円 65g・500円　発売元:資生堂商事株式会社

新・基礎洗顔料シーズ She's